

第 75 回 歴史リレー講座「仏教伝来から聖徳太子へ」 西山 厚氏 (R2.12.20)

『日本書紀』が完成して今年で 1300 年ということなので、きょうは『日本書紀』を読みようと思います。仏教伝来に関する部分です。歴史を学ぼうとする時、ある説に接した際には、元になる史料でみずから確認してみることが大切です。不正確な場合もある解釈から離れるためです。難しそうな『日本書紀』ですが、書き下し文の助けを借りれば、おおよその内容は誰でも理解できるので、きっと面白いと感じていただけたらと思います。

では、仏教公伝の年とされる欽明天皇 13 年 (552) から、推古天皇 29 年 (621) まで、約 70 年間に記された部分を読んでいきます。仏教公伝とは、百済の聖明王が金銅の釈迦仏像と経典などを欽明天皇に伝えたことをいいます。初めて目にする煌びやかな仏像に欽明天皇は歓喜しますが、仏教導入の是非については豪族に意見を求めました。

蘇我氏は、海外諸国に倣って取り入れるべきと主張しました。物部氏と中臣氏は、外国の神を信仰すれば日本の神々から怒りを買うと猛反対しました。欽明天皇は、国として仏教を取り入れることはしないと決めて物部氏と中臣氏の顔を立て、仏像を蘇我稲目に与えることで蘇我氏の顔も立てました。大喜びした稲目はさっそく飛鳥向原の自宅を寺に改修しますが、まもなく全国に疫病が蔓延し、死者が続出します。「それ見たことか」と、物部氏と中臣氏はすぐさま天皇に直訴。仏像を難波の堀江に流し、寺を焼き払ってしまいました。

敏達天皇 13 年 (584) 9 月、百済から再び仏像がもたらされます。「仏法僧」の 3 つが揃って初めて正式な仏教といえるため、蘇我馬子は播磨国で還俗していた高句麗出身の惠便えべんを飛鳥に呼び寄せます。この惠便を師として善信ら 3 人の尼僧が誕生し、馬子が石川の家 (檀原市) に仏殿を造ります。これが日本仏教の正式な始まりだと『日本書紀』は伝えています。

しかし翌年、再び国中に疫病がはやったため、物部氏と中臣氏の勧めに従い、敏達天皇は「仏法を滅ぼせ」と命令。物部守屋は馬子の建てた塔や仏像などを焼き、石像は難波の堀江に流しました。この年 6 月、蘇我馬子も病んでいましたが、仏法でなければこの病は治せないと天皇に訴えます。天皇はお前ひとりの信仰に限るならと許し、拘束していた尼僧も解放してくれました。日本に仏教を弘めることを絶対に諦めない馬子の揺るぎない信念には驚かされます。

用明天皇 (聖徳太子の父) 2 年 (587) 4 月、疫病に罹った天皇は仏教への帰依を表明しますが、発病後わずか 1 週間で崩御。同年 6 月、善信尼は出家に不可欠な受戒を目的とした百済行きを馬子に申し出ます。ところが翌月には、対立を深めていた蘇我氏と物部氏の戦争が勃発。物部軍に蘇我軍は歯が立たず、三度も退却を強いられました。そこで、聖徳太子は四天王像に祈りを捧げ、勝てば寺 (四天王寺) を建立すると誓いました。祈りが通じたのか、戦いは蘇我軍の勝利に終わり、翌年には善信尼らが百済へ向けて無事出発することになります。

推古天皇は即位 (593) と同時に聖徳太子を摂政に据え、翌年には仏教興隆の命を下します。これをきっかけに豪族たちは次々と仏舎を造り始めました。推古天皇 12 年 (604)、太子は憲法十七条を発布。注目すべきは第十条で、「人には心があり、それはそれぞれに違っている。だ

から人によって考えが違うのは当然だ。意見の違いを決して怒ってはいけない。私たちは聖人でも愚者でもない。凡夫に過ぎない」とあります。現在、とりわけネットの世界では、考えの異なる他者を貶めて死に追いやる事件が頻発しています。聖徳太子の教えの再評価が必要ではないでしょうか。

他の史料（622年2月22日）とは異なり、『日本書紀』では聖徳太子の死亡日は推古天皇29年（621）2月5日となっています。死因は疫病と思われ、大臣から庶民に至るまで多くの人々はその死を深く悼んだと書かれています。